

徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

静岡県知事

川勝平太氏

Heita Kawakatsu



経歴

1948年、京都生まれ。1972年、早稲田大学第一政治経済学部経済学科卒業。1975年、早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了。1985年、オックスフォード大学哲学博士(D.Phil.)取得。早稲田大学政治経済学部教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長を経て、2009年7月、静岡県知事選挙に初当選。近著「近代文明の誕生」(日本経済新聞出版社)ほか著書多数。

世界史上最初の軍縮革命を実現した徳川家康

戦国時代は軍事革命の時代

G.パーカーは名著『The Military Revolution』(直訳では『軍事革命』、邦訳名は『長篠合戦の世界史』同文館)で、ヨーロッパが世界を制覇したのは「16世紀の軍事革命」を経験したからだと述べています。軍事革命とは「火器の使用」「軍隊の増強」「要塞の強化」の三つをさします。

パーカーの関心はヨーロッパでした。同じ16世紀の日本は歴史上の「戦国時代」に当たり、「軍事革命」の三要件をすべて実現していました。それどころか、戦国時代の日本の軍事力はヨーロッパのどの国をも凌駕していたと見られます。

一五四三年に種子島に伝来した火縄銃は翌年に国産化され、アツという間に全国の戦

国大名に普及しました。織田信長と徳川家康の連合軍が、一五七五年の長篠合戦で、武田勝頼軍に圧勝しましたが、長篠合戦は、当時のヨーロッパにおけるどの戦争と比較しても、使われた鉄砲の数でも戦術でもはるかに高い水準にありました。

戦国時代の日本では、火器の生産と使用の拡大、軍隊の増強、鉄砲の使用に伴う城郭(要塞)の山城から平城への大変化を遂げました。当時の日本は、ヨーロッパに勝る軍事革命を経験しており、世界トップクラスの軍事大国でした。

世界的に評価される家康の軍縮政策

信長の死後、秀吉が天下をとり、朝鮮侵略を断行しました。秀吉の派遣軍は侵略当

初は破竹の進撃を見せました。それは鉄砲を用いた軍事力で朝鮮王国よりも優位に立

っていたからです。しかし明の大軍が加わり、戦線は膠着状態になりました。

家康は九州まで行きましたが、玄海灘を渡っていません。その態度が、家康が天下の覇権を握ったとき、李氏朝鮮王国と平和的な国交を回復できた要因です。家康の対外政策の基軸は経済・文化交流でした。つまり平和的でした。

一方、国内政策では、鉄砲・火薬製造の規制をし、結果的に世界史でも稀な軍縮政策を進めました。江戸時代には鉄砲生産は縮小し、鉄砲はほとんど使用されない社会となり、現代の学者は「パクス・トクガワナ(徳川の平和)」と呼んでいます。平和な時代を謳歌した日本は、同時代のイギリスなどが富国強兵を国策として覇権主義に走ったの

と対照的です。

ノエル・ペリンは『鉄砲を捨てた日本人』日本史に学ぶ軍縮(拙訳、中公文庫)で、徳川時代の軍縮は世界史上類例がなく、核競争の続く現代において、その叡智に学ぶべきであると説いています。江戸時代の鎖国は負のイメージをもって語られることが多いのですが、鎖国は、それまで大陸文明に依拠していたのと異なり、日本が自立したことの証しです。

江戸時代の武士は、刀よりも筆をとって学問をし、徳を磨いた知識人です。「パクス・トクガワナ」の平和のもとで、明治維新後にアジア最初の近代化を担う人材の育成が進み、独自の日本文化が成熟しました。江戸時代は今日のふじのくにの理想「富国・有徳」の先駆けです。その基礎を築いた徳川家康の功績は改めて評価されるべきです。



狩野探幽「東照社縁起」慶長20年(1615)、大坂夏の陣に臨む家康公(日光東照宮蔵)

私の一文字

川勝平太さんが選ぶ
徳川家康公を表現する一文字。

徳川家康は朱子学を重んじました。学祖の朱子は四書(大学・論語・中庸・孟子)を重んじ、四書は江戸時代の武士の必読文献でした。「大学」の本文冒頭には「大学の道は明德を明らかにするにあり」とあります。すべての武士が有徳の人をめざしたのです。

徳

著書のご紹介



ノエル・ペリン著、川勝平太訳
「鉄砲を捨てた日本人」
日本史に学ぶ軍縮
紀伊国屋書店、後に中央公論新社

ダートマス大学でアメリカ文学を教える著者が、日本の歴史に教訓を汲みとった反戦・反核の書。16世紀後半に西洋と日本がともに鉄砲の時代を迎えながら、なぜ日本は、鉄砲の放棄・削減による平和への道歩んだのか。